



ぼくがよければいいの

~カード幼稚園のトランプ君~

にし はる

ここは、おもちゃの国の、カード幼稚園。

ある冬の寒い日、トランプ君は、クラスの部屋の中でいいことを思いつきました。

「薪ストーブのまわりを、つみきのカベでかこんで、ぼくだけあたたまろう。」

すると、仲良しのジョーカー君が

「それはいい考えだね。」

と、賛成しました。

トランプ君は、ジョーカー君だけ仲間に入れることにしました。

そして、ふたりはさっそく、高い高いつみきのカベを、せっせと作りました。

カベの中に入れてもらえなかった、クラスメートのスペード君、ダイヤちゃん、クラブ君、ハートちゃんは言いました。

「寒いよ。中にいれてよ。」

「いやだよ。ぼくがよければいいの。」

トランプ君は言いました。

「そうだよ、そうだよ。」

ジョーカー君も言いました。

しばらくすると、つみきのカベの中は、あたたまりすぎて暑いくらいになりました。

そこでトランプ君は、ストーブの温度を下げるため、燃えている薪を何本も取り出して、そのままポイッ、ポイッとカベの外へ投げました。

「あついッ！なにするんだよ、あぶないじゃないか！火事になるぞ！」

カベの外にいたスペード君が、怒って言うと、トランプ君は言いました。

「ぼくがよければいいの。」

「そうだよ、そうだよ。」

ジョーカー君も言いました。

つみきのカベの中は、快適になりました。

でも、しばらくすると、また暑くなってきました。

「おかしいな、薪は減らしたのに。」

トランプ君は思いました。

するとその時、つみきのカベのすきまから外の様子を見ていたジョーカー君が叫びました。

「火事だ！カベの外は火の海だ！」

「なんだって！だから暑かったのか！早く逃げなくちゃ！」

トランプ君は、火の海の中を逃げるために、バケツにくんであった水をかぶろうとしました。

すると、横からジョーカー君が来て、その水をぜんぶ、自分だけバシャーンとかぶってしまいました。

「おい、ジョーカー君、何するんだよ！」

すると、ジョーカー君は言いました。

「ぼくがよければいいの！」

そして、つみきのカベをこわして、トランプ君を残し、ひとりで外へ逃げて行ってしまいました。

火の海の中に、ひとり取り残されたトランプ君は、泣き叫びました。

「おーい、だれか助けてよう！」

すると、

「えいさッ えいさッ」

というかけ声が聞こえてきました。

見ると、スペード君、ダイヤちゃん、クラブ君、ハートちゃんが、バケツ・リレーをしながら、1本の逃げ道を作ってくれていたのです。

「さあ、早くここから逃げて！」

ダイヤちゃんが叫びました。

トランプ君は、みんなが作ってくれた逃げ道を必死で逃げて、なんとか助かりました。

命からがら逃げ出したトランプ君は、言いました。

「ぼくだけがよければいいって思っていたけれど、そんなのダメだね...」

すると、

「そうだよ！」

と、クラブ君が言いました。

「そうよ。“みんな”がよくなっちゃね！」

ハートちゃんも言いました。

みんな、楽しそうに大笑いしました。

その様子を遠くで見ていたジョーカー君がやってきて、言いました。

「あの、ぼくも仲間に入れてくれないかな...。」

トランプ君は言いました。

「もちろんだよ！さあ、みんなで楽しく遊ぼう！」